

## 日本農業新聞 「野良ばなし」 15.6.10

### 「日本と欧州の傘」

東北と北陸地方が7日に梅雨入りし、梅雨のない北海道を除き、全国が一斉に梅雨入りした。梅雨ときたら、代名詞のように思い浮かぶのが傘。雨傘のことを英語で、アンブレラといい、イタリア語のオンブレラ（日陰）に由来する。さらに、パラソルの語源はイタリア語のパラ（防御）とソル（太陽）で、日傘のこと。

ヨーロッパに雨傘に当る言葉がないのは、はっきりとした理由がある。降水量を調べてみると一目瞭然。最近30年間における年間平均降水量は、ロンドンが751ミリの、パリ648ミリアに対し、東京は1,467ミリ、大坂1,306ミリ。で、概ね、日本の約半分。

それに降り方もやや異なっており、ヨーロッパでは霧雨のような細かい雨が降ることが多い。洋画では、紳士が傘をステッキ代りに使い、レインコートだけの恋人同士が小雨に濡れながら、愛を囁くシーンがハイライト。

一方、雨粒の大きい日本のラブシーンは、相合傘でしっぽりと濡れて行くのがお馴染みの情景。あなたはどちらがお好みか。

このように雨の量が多く強い降り方をする日本製の傘の規格は、1時間に5ミリの降水量に耐えられるようになっている。この時間雨量5ミリという雨は、雨音がはっきりと聞え、路面に落ちた雨粒が跳ね返る程度の降り方。半日も降り続くと60ミリとなり、明らかに災害対策が必要な雨の量。

そして、夏至のある六月の晴天の日のお昼前後は、日射や紫外線の量が最も強い。故に、農家にとって、六月は晴れても降っても気が抜けない。長雨による病害虫の発生予防に汗をかき、有害な紫外線から体を守ることに對しても、細心の注意が必要だ。

( 気象情報システム株式会社 高津 敏 )